



京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

平成19年度女子高校生車座フォーラム

11月10日(土)に2回目の女子高校生車座フォーラムが開催されました。研究者ってどんな仕事なの?女性研究者の声を直接聞いてみたいという声に応え、地域連携事業の一環として、高校生と研究者の出会いの場を作りました。場所は京都大学の歴史的建造物の一つで、西園寺公望の京都別邸であった清風荘です。

午前は、登谷美穂子・センター特任教授の司会で、松本紘・京都大学理事、稲葉カヨ・センター長からのあいさつに続き、講師11名がそれぞれの専門分野や研究者になったきっかけなどを話しました。高校生同様、講師たちも興味津々で聞き入っていました。今回参加した講師陣は、松本紘(宇宙工学)、稲葉カヨ(生命科学研究科 免疫学)、伊藤公雄(文学研究科 文化社会学、ジェンダー論)、岸泰子(工学研究科 建築史学)、登谷美穂子(理論物理学)、中西麻美(フィールド科学教育研究センター 森林生態学)、野口順子(理学研究科 生物学・植物系)、松下佳代(高等教育研究開発推進センター 教育方法学)、松宮由美(化学研究所 分子工学)、宮部貴子(霊長類研究所人類進化モデル研究センター 獣医学)、そして私、鈴木晶子(教育学研究科 教育思想・哲学)の11名です。たまたま出会った本やテレビなどメディアの情報がきっかけで、研究者になった話、あるいは尊敬する師との出会いを通して研究者を目指した話など、実に様々です。性別、年齢、キャリアも様々の講師陣でしたが、中学や高校時代から研究者になろうと決めていたという人は少なく、偶然の出来事がきっかけで研究の道に入ったという人が多かったようです。講師一人ひとりの話に熱心に耳を傾けていた皆さんは、午後の分科会はどこに参加しようかしら、と案案にくれてかなり迷っている様子でした。

午後は3つの分科会に分かれ、1時間半にわたる話し合いの時間がもたれました。少人数で、また院生たちも会話に参加するので、高校生一人ひとりの疑問や質問にも、様々な角度から応えていくことができます。各分科会とも、午前中の講師自己紹介を受けて、さらに研究分野や研究室での研究内容、大学院にはどういったら入れるのか、論文を書くというのはどういうことかなど、かなり具体的に大学や大学院での勉強や研究の仕事について話し合われました。

最後は再び、参加者、講師、院生みなが一堂に会する全体会が行われました。はじめに、3つの分科会で、どんな内容のことが話し合われたかについて報告がありました。続いて、全体での質疑応答の時間です。「宇宙開発は宇宙の環境破壊につながる危険はないのですか」、「どうすれば日本の教育は改善されると思いますか」といった鋭い質問が飛び出し、講師たちも研究と社会や現実との関わりをどう伝えようかと一所懸命でした。ま



た、「研究していてつらいときに自分を支えてくれるものはありますか」、「研究をしていて誇れると思うことは何ですか」といった研究者として生きることの根本的な姿勢に関する質問

や、「研究者の仕事と他の仕事との違いは何ですか」、「研究のテーマはどうやって見つけるんですか」、「いま流行っている研究はありますか」など研究についてのより具体的な質問もありました。大学進学や大学院進学を念頭に置いた質問もありました。「理学部と工学部とはどこが違うのですか」、「心理学に関心があるのですが・・・」、「外国の文化や言語について学ぶにはどの学部に行ったらいいのですか」といった質問です。さらに、「日本の研究者が今しなくてはいけないことは何ですか」、「宇宙や星は何のために生まれてきたのか、哲学とそして宇宙の両方の面から知りたい、考えてみたいです」といった質問やコメントも出ました。高校生が日本の研究の未来を、柔軟な発想でいかに真剣に考えているかがひしひしと感じられました。文系・理系の枠を超えて、宇宙を、人間を、大きなスケールで捉えるような研究を日本から発信していくような次代の研究者が、このなかから生まれるかもしれません。核心に触れる問いかけの連続に、講師たちも短い時間でどうやってそれに十分に答えようと汗をかきかき、楽しいなかにも緊張感のあるひと時でした。

議論全体を通して気づいたことは、研究者一般の仕事や生き方についての質問が中心で、女性の研究者ならではの特徴や困難、苦勞など、女性の研究者に特化した疑問がほとんど出なかったということです。今日の話は男子生徒たちも聞きたい話だったと思うといった声も出ました。こうした高校生と研究者の出会いの場は、女子高校生に限るということなく、様々な機会を捉えて展開していくことが必要だと思います。

車座フォーラムは、前回以上の反響を得ることができました。参加した高校生の中には、その後、京大11月祭の学部企画にも参加し、学部生や院生との交流が続いているという話も聞きます。車座フォーラムの企画がそんな様々な交流の誕生の場になるならば、これ以上の喜びはありません。



(地域連携WG主査、教育学研究科教授 鈴木晶子)

国際シンポジウム「大学の女性たち」

11月7日（水）午後4時半から7時、芝欄会館稲盛ホールにて開催しました。その要旨を報告します。

＜開会の挨拶＞ 稲葉カヨ

（女性研究者支援センター長・生命科学研究科教授）

この10月から、女性研究者支援センターのセンター長に就任しました。女性研究者支援センターは、昨年度の9月に科学技術振興調整費の採択を受け、尾池総長、松本理事のご支援のもとに発展してきています。4月には日本で初めて、大学に独自の女性研究者支援センターの施設ができ、高く評価されています。

今日は二人の演者の方にお話をうかがいます。お一人がPhoebe S. Leboy先生で、ペンシルバニア大学を2年前に退官され、現在は名誉教授です。ジェンダー、女性研究者の支援などについて、活発に活動してこられ、Association for Women in Science President-electです。先生自身は生化学の研究の分野で、キャリアを積んでこられました。ご自身の興味は、骨、骨形成とミネラルとの関係だそうです。未熟な細胞から骨の形成に至る、いろいろな段階の細胞を、分子生物学的あるいは細胞生物学的に解析されていて、非常に著明な業績を上げていらっしゃいます。

もう一人は坂東先生です。坂東先生は、私が京大に入ったとき物理学教室の助手でした。何人かの人たちに誘われて、先生が当時始められた「婦研連」（「女性研究者の会・京都」の前身の母体）にときどき顔を出させていただいていた。また、現在の朱い実保育園の前身として、自宅で共同保育を始められ、それが大きく広がって、朱い実、風の子の保育所に発展してきました。坂東先生自身は、素粒子という物理学の分野の研究者ですが、いまご紹介したように、女性研究者の育成、互助活動にも非常に熱心に取り組んでこられました。それ以外にも、種々の情報収集活動をされていて、愛知大学のサポートを受け「女性研究者のリーダーシップ研究会」を設立して活動を発展させておられます。

今日のお二人の話は、非常に楽しめだと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

＜講演＞ Phoebe S Leboy

「Recruiting and Retaining Women in Science: Different Disciplines Need Different Solution」

京都大学にご招待いただき、たいへん光栄です。今日は、日本の活動の参考になることを期待して、アメリカでの女性科学者の地位向上の取組について、話をさせていただきます。

アメリカの大学では、教員は、まず7年任期の助教として雇用されます。そのステップを踏まなければ、終身在職権を得ることはできません。私は1971年に、ペンシルバニア大学のデンタルスクールで准教授に昇進し、女性として初めて終身在職権を得ました。1976年に生化学の教授になりましたが、アメリカでは5人目の女性でした。



1971年のペンシルバニア大学では、教授のうち、男性は434人、女性11人で全体の2.5%、准教授は7.0%、助教では、13%でした。これは今、日本でよく見られる数字と、それほど変わらないのではないのでしょうか。2001年の同大学の統計では、教授に占める女性の割合が14%、准教授が18%、助教が35%です。30年でかなりの改善が見られますが、女性の比率という点で、アメリカは、世界に誇れる状況ではないのです。

1960年代後半に、雇用者は性別で差別をしてはいけないという法律が通過したことも改善の追い風になりました。さらに地位向上を目指そうとする女性科学者が集まり、1971年にAWISを組織化し、女性研究者を支援するために、プログラムを作り、大学に女性のためのセンターを作ったのです。ちょうど京大での取組と同じような活動をしたのです。さらに、科学に興味を持つ女子学生の指導に対して基金を提供し、学部、男女別に人数と資格保有状況を公表して行きました。また、女性科学者のモデルを紹介し、キャリア形成の道筋を提示しました。

日本の最近の統計によると、学部生では女性の割合が25%ですが、学位を取る頃になるとだんだん減ってきます。これはアメリカの25年前の数字と同じです。数学、コンピューター科学、工学、物理においては、学部生の頃から女性が少なく、化学に関しては、院生になってから減少する。一方、生物医学の分野では、院生、ポストドクの段階では女性の割合は50%ですが、教職に就くところで減少が始まります。科学の分野ごとに違ったアプローチを取らなければ、女性科学者のキャリア形成が考えられないことがわかります。

さて、アメリカでは少し前まで、教授職の約半数は、子どもがいませんでした。家族を持って子どもを育てつつ、教授に昇進するというのは、男女にかかわらず極めて難しいのです。しかし、部局の女性の数が1/3を超えてくると、保育所設置要求、育児・介護による研究猶予期間の要求が出され、大学側も無視できない状況になり、変革が起こってきています。

家族や生活についての支援不足は、女性が研究者、科学者として成功することを阻害してきました。論文を書かなければ助成金を得ることがないし、昇進することができない中で、女性がその時間とチャンスを得るには、パートナーである夫が、育児や家事をサポートすることを奨励していかなくてはなりません。また、家庭と仕事の両立ができる政策制定の運動を行い、その一方で、大学、研究機関、ビジネス界に対して、慣習を変えるはたらきかけが必要なのです。（編集：伊藤公雄）

アメリカの実情、日本の現実

＜講演＞ 坂東昌子（愛知大学教授）

「女たちのネットワーク」

“Active Girls Network Without Boundary”

今、Leboy先生からアメリカの様子が話されたので、私は日本の様子を、京都大学でやってきたこと、それがどういうふうに世界を変えてきたか、という話をしたいと思います。

「Good old boys network」があるそうです。社会的なルールを守りながら暮らしていくために、必要なことを教えてくれる男性のための場所だと。私は、それなら「Active Girls Network」をつくろうじゃないか。こう考えているわけです。

私は、博士課程1回生のときに結婚して、2回生のときに子どもが生まれました。当時は「女子学生亡国論」もあり、女は仕事をやめろし、だめだとも言われていました。そして薬学部的女子院生達の調査などをみんなで学習し、女性は結婚をしても仕事を辞めるわけじゃない。しかし子どもができると仕事を辞めるという事を知りました。ならば何とかしようとそのころ集まった仲間と、京都大学のなかに婦人研究者連絡会をつくり、京大に保育所をつくる運動をしました。まず、私の家で共同保育を始め、保育所作りの活動が続けていく中で、朱い実保育園が、続いて風の子保育園ができました。私は、女性が自らの能力を発揮して仕事を続けていくことと、家庭を持つこととを両立するために必要なものがなかったから、保育所を作り、学童保育、PTA、女性研究者の会、男女共同参画の学会の支援、キャリア支援をやってきたのです。ただ科学者としてだけではなく、家庭人として市民として人間として、生きてきたのです。そのなかでデータを分析し、客観的事実を基に目標を立て、みんなで協力すれば夢は実現することを学びました。

1975年は国際女性の10年の始まりの年です。そして国際婦人年の1985年に「雇用機会均等法」が、1992年に「育児休業法」ができました。涙ぐましい努力の成果です。雇用機会均等法も育児休業法も企業では、ある程度機能し、子どもを持って働く女性が増えてきました。一方、大学ではうまく機能しない。文科省に、その調査データを示し、研究者は、休職というより研究を続けながら育児期間を乗り越える、むしろサポート体制こそ必要なのだと、私達は訴えました。そして、アメリカでは女性研究者をサポートしている大学に、支援のお金を出している例があることを伝えました。これが根拠になって実現したのが今回の支援事業です。京大も女性研究者の支援事業に採択されました。この世論を大きく盛り上げたのは、自然科学系の学協会連絡会です。今は50学協会を超える大きな組織に成長しました。そこで実態調査を、提言をやって、子どもができて休んでいた人に、もう一度研究に戻るための復帰資金（RPD）を用意する、そういうシステムなどをつくりあげたわけで

す。これはもう、2万人のアンケート調査の重みだと思います。私たちが協力して世論をつくって、しかもデータに基づいて説得したら、社会を変えられることができるということを知った。これは大きいです。

でも私は、ちょっと先が見たいなと思っています。21世紀の科学とは、どうあるべきかということも考えたいという気がします。『プロジェクトX』をご存じでしょうか。科学者や企業家が出てきて、ある夢を実現するために、一所懸命頑張る絵を描いたドキュメンタリーです。けれども、あれは男のロマン、女が1つも描かれていないじゃないかという批判が出て、「女たちの10年戦争」「男女雇用機会均等法」が生まれたそうです。男は「プロジェクトX」で、Xが1つだけ、女は2個で「プロジェクトXX」と命名して、ドキュメンタリーをつくらうかなと思っています。求めないと与えられない。でも英知と人間を愛する心、これを基本にやっていきたい。「アクティブ（生き生きと）、ビューティフル（あざやかに）、クリエイティブ（創造的に）」みんなと一緒に頑張る。これが、私が科学者としてやってきて、科学が教えてくれたことではないかな。

＜閉会の挨拶＞ 横山美夏

（女性教員懇話会代表・法学研究科教授）

今日はほんとうに興味深いお話をありがとうございました。坂東先生からは「質が大事だ」、Leboy先生からは「量も大切だ」とうかがったと理解しております。

Leboy先生のお話をうかがって、日本の社会を変えなくても、男社会を変えなくても、まず、科学者の世界を変えることにより、女性科学者の進出を果たしていくことはできると思いました。そういう意味で非常に励ましを受けました。

また、お二人の先生は「家族の生活を維持することに優しい環境づくりが大事だ」ということを強調され、保育所の問題を重点的にとりあげておられました。しかし、ライフスタイルが多様化する時代に当てはめると、保育所の問題だけでは、「それはあなたのライフスタイルの問題。あなたが子どもをつくったのだから、あなたが責任を取りなさいよ」と言われてしまう可能性もあります。もちろん、子どもを育てやすい環境をつくらなくてはいけないと思うと同時に、これからの高齢化社会においては、誰もが逃れることのできない問題である介護について、取り組むことが、お互い様という雰囲気の中で家族の生活を維持できる「優しい環境」を作るために必要であると思います。

今日は理系のお話が多かったのですが、今後の日本の社会で文化系においても、専門分野ごとにいろんな先生と交流しながら、日本の科学者全体のなかで女性が発展していく方策を、みんなで協力し探求して行きたいと思っています。ほんとうに、どうもありがとうございました。

◆女性のための相談室・開室日◆

12月7日、14日、21日、28日

1月4日、11日、18日、25日

2月1日、8日、15日、22日、29日

連載：研究者になる！－第6回－

先日の新聞で、オゾン層保護に対する松本泰子先生（地球環境学堂准教授）の傑出した貢献に対してアメリカ環境保護局が「ベスト・オブ・ザ・ベスト」として表彰したと知りました。センターでは、先生のユニークな生き方や研究者になられた経緯などをお聞きしたいと考え、インタビューをさせていただきました。以下はインタビューの概要です。



■大学卒業後、英語教師を12年間お勤めの後、イギリスに留学されましたが、一旦辞職し、留学されることについて帰国後の生活について不安はなかったですか。

「道具」としての英語のパワーに魅せられて、「私は英語を使って学生に何を教えたいのか」を探しに行きました。失敗しても後悔しないぞ！という気持ちが強く、転職のことは心配しませんでした。留学先はノーリッジ（ロンドンから3時間の町）で、いろいろなNGOが活発に活動している地域でした。30歳を過ぎての留学で、時間もお金もなかったし、ケンブリッジの英検に合格しなかったのも、自分の語学力をブラッシュアップしようと、毎夕、地域の市民団体の集会に参加していました。

■そこで、環境保護運動に出会ったのですね。

もともと野生生物保護に興味がありましたが、プロとして、職業としてNGO活動をする人達に出会ったことが驚きでした。欧州には、NGOが環境問題を解決するために有用な方法論があり、日本にも導入すべきだと考えました。私にとって「道具としての英語」とはこのことだと思いました。

■帰国されてすぐにWWF(World Wide Fund for Nature)に採用されたのですか。

帰国後数か月後です。その間は出身大学でアルバイトをしていました。WWFでは、トム・ミリケンという米国人のボスについて、フィールド調査のコーディネイト、マスコミ対応、地元協力者との対応などを徹底的に教えてもらいました。正規職員でしたが1年で退職しました。今、採用試験を受けるとすれば、博士号が条件であることが多くもったいないことをしたなと思います。（笑）

■なぜ、おやめになったのですか。

WWFでは、トンボの保護の研究者として有名なノーマン・ムーア博士に教えを受け、自分が知らないといけなことがあまりに多いことに気づいたのです。彼の活動拠点であるイギリスに行き、イギリスの自然保護区の管理のありかたを学びたいという気持ちが強くなって、イギリスに飛び出して行ったのです。

■その後、グリーンピースに入られたのですね。

ロンドンにいた時に、WWFの時の上司だったミリケンが、グリーンピース・ジャパンで、温暖化とオゾン層の担当を探していると教えてくれました。グリーンピース

のことも、温暖化やオゾン層のこともそれまでは余り知りませんでした。好奇心半分で本部のあるアムステルダムに行き面接を受けましたが、面接者たちの有能さとパワーに大きな刺激を受けたことで、新しい分野に挑戦する決心をしました。グリーンピースにいた8年は、主に欧州で本当にいろいろなトレーニングを受けました。常に時間に追われ、非常に厳しい状況で仕事をしてきましたが、これらは今の私に大変役立っていると思っています。グリーンピースでは、温暖化の問題とオゾンの問題に並行して取り組んできましたが、「温暖化」の問題は世論の後押しがあり、新聞にも取り上げられるが、「オゾン」の問題は、全くというくらい取り上げてもらえないという状況に苦慮していました。ならば自分でやろうと奮起し、はじめて論文を書き、「環境と公害」に投稿しました。私は、オゾン層の問題の解決のために促進されてきた温室効果ガスである「代替フロン」への取り組み、すなわち国際協定間の政策矛盾の問題への取り組みが必要であると考えていまして、世論やグリーンピースの活動の重点が二酸化炭素問題に移行しつつある中で、諦められずにいました。

■そこで、大学の研究者に転じられたのですね。

代替フロンの問題に、じっくりと取り組みたいという思いでいた時に、参加していた環境問題の研究会から、大学の教員という話を紹介していただきました。そして2つの大学、研究所を経由して、京大にきました。環境問題は一つの学問範囲におさまらないものですから、各専門分野における学問の深化と同時に学際的なアプローチが必要とされます。そういう意味では、この地球環境学堂は、いろいろな分野の研究者がいて大変刺激的なところですし、私自身もっと役に立って行きたいと思っています。

■京大の教員としては特色ある経歴をお持ちですが、京大には、ずっと大学で研究一筋という研究者の方が、まだ多い状況です。そのような研究者との違いをどんな所に感じられますか。

いろいろな意味（笑）で、違うなと思います。京都大学において、私に求められている役割は何か、何ができるか？その答えを探しながら、毎日を葛藤の中で暮らしています。学生には、現場を持ってきた者の視点で情報を発信していきたいと思っています。

■センターの活動について、ご意見をください。

母の介護を経験した中で、出産・育児の場合だけでなく、家族の中に介護が必要な人、病気、障害のある人がいる場合、何らかの支援があればいいなと思いました。男女にかかわらず、出産・育児、介護等で大変なある期間だけ仕事を一定程度減らすことを認め、求められる業績のレベルにも大学として公的な配慮があればいいと思います。（聞き手：登谷美穂子）

